



TITLE:

星を知つて

AUTHOR(S):

北村, 重雄

CITATION:

北村, 重雄. 星を知つて. 天界 1931, 11(123): 354-354

ISSUE DATE:

1931-06-25

URL:

<http://hdl.handle.net/2433/161676>

RIGHT:

星を知つて

會員 北 村 重 雄

私が星を知り初めたのは、僅か二年前の事です。其の時N商業學校四年生だつた私は、春陽麗かな校庭の一隅で、同級のYの星物語りを熱心に聽いてゐたものです。彼は私に野尻抱影氏著の「星座巡禮」を貸して呉れました。私はこれを反覆愛讀しました。そして私は純情の天文少年になつたのでした。毎晴夜に必ず私は物干臺から空を仰ぎました。四月の初めでしたから、美しいオリオン座も既に西に傾いてゐました。星座も一年程の間に大方見覚ええました。先づ「簡易星圖」を手に入れて火星の運行を記入しました。ますます興味が出て來ました。それから暫く天文書を集めました。「古賀恒星圖」、「星座早見」、「天文界の智囊」、「月」、「趣味の天體觀測」、「天體望遠鏡の作り方」、「星座の親しみ」、などが揃ひました。その時分から、星を覗きたさに、小望遠鏡を自作しました。これで以て星圖に記されてゐる星團などを、首の痛くなる迄覗きました。野尻抱影氏に突然お葉書を出したのもこの時分の事で、其の後ずつとお便りを頂いてゐます。双眼鏡を手に入れて、Y君と一緒に驚の α 及びセフェウスの λ 兩變光星の觀測もやり始めました。日々の觀測をノートに整理して、新聞の天文記事などを貼りつける様にしました。こうして日一日と星への親しみを加へました。明日の試験の爲に机に向つてゐる間でも、心は夜空に輝く美しい星々を求めてゐました。そして屋根に出て、彼等を眺める時だけは、一切を忘れる事が出來ました。學校を出て此の淋しい片田舎に移り住むやうになつてからは、一人の友も無い夜々、僕は星ばかりを見つめて來ました。同好會に入つてからは、愈々熱心が加はつて來ました。今年の二月の夜更けに、野原へ出て、憧れのカノープスを見付けて、小供の様に喜んだ事もあります。金星の三日月形を知つて雀躍した事もありました。丸善へ行つてシュリツグの星圖や、エルヂの星座日誌や、サービスの本などを求めました。僕の不完全なレンズでも、M 34, 35, 36, 37, 38, 39, 44, プレアデス、ヒアデス、ペルセの χ h星團、木星の月などは可なりよく見る事が出來ます。此の頃は又よい望遠鏡が欲しくて、方々よりカタログを送つて頂いてゐます。岡山の水野氏よりも度々御便りを頂き御指導を受けてゐます。僕の希望としては、天文臺にでも入つて、より深く天文をやつて見度いのですが、種々の事情で沙汰止みになつてゐます。一度花山を訪ねて見たく思つてゐます。兎に角かうした機縁から星を知り初めた私は、今後共、一生この喜びを持ち續けて行く事でせう。最後に天文同好會のより一層の御發展を祈ります。